





## はじめに

現代では、日本語を読み書きする場合でも、アルファベット(ローマ字, ラテン文字)が重要な働きをしています。雑誌でも新聞でも身の回りにあるものを見てみると、アルファベットが多く使われており、アルファベット抜きで現代の日本語を考えることができないくらいです。これだけ広く使われているアルファベットですが、漢字や仮名に比べ、その文字の特徴や歴史についてはあまりよく知られていません。漢字や仮名については国語や社会の授業でその構造や歴史について学んだことはあっても、授業でアルファベットについて学んだ経験のある人は少ないでしょう。それもそのはず、そもそもアルファベットについて深く学んだことがある英語の先生が多くありません。英語教育では文字はあまり関心を持たれていない分野のようで、教員養成系の大学でも英語の書記体系を扱う授業はほとんどないのが現状です。英語教師になろうという学生にさえ教えられていないのですから、日本人の多くがアルファベットに関する知識をほとんど持たないのも当然です。

仮名が漢字を基にして作られたことや、漢字の構成原理を知らなくても、仮名や漢字を使うことができるように、アルファベットについて知らなくても、アルファベットを使って英語を書いたり読んだりすることはできます。しかし、普段意識せずに使っている文字、書記体系の裏にある原理を知るとは楽しいことです。ちょっと複雑なところもありますが、パズルを解くような感覚で、楽しんでお読みいただければ幸いです。

本書を読み始めるにあたり1つご注意いただきたいことがあります。それは、本書はいわゆる“フォニックス”の本ではないということです。本書の目的は、すでに英語の基礎を身に付けている人に、習得した綴りと発音の仕組みがどのようなものであるか、なぜそのような仕組みが成立したのかを理解してもらうことであり、この本を読めば、知らない単語でも綴りを見れば発音できるようになるわけではありません。英語の綴りと発音の関係は複雑です。規則的でわかりやすい部分だけを扱い、例外や複雑な部分には触れなければ、何となくわかった気にはなりやすいですが、それでは英語の書記体系の全体像、実体が掴めたことになりません。本書を読み終えた後、「英語の綴

#### iv はじめに

りは簡単だ」ではなく、また「英語の綴りは難しい」でもなく、「英語の綴りの難しさが何によるものかよくわかった」と思ってもらえたら、本書の目的の1つが達成できたと言えるでしょう。

#### ○本書の構成

本書の構成は以下のようになっています。

- 第 I 章 「五十音図」について考える——調音音声学入門
- 第 II 章 発音と綴り字——基礎編
- 第 III 章 発音と綴り字——応用編
- 第 IV 章 分綴法
- 第 V 章 文字の種類・発達・用法
- 第 VI 章 アルファベットの起源と発達
- 第 VII 章 英語における正書法の発達と音変化

基本的に各章はその前までの章で学んだことを踏まえた内容となっていますが、第 IV 章「分綴法」や第 V 章「文字の種類・発達・用法」は飛ばし、先に後の章を読み、後で残った章を読んでもいいでしょう。前の章は後の章を読まなくてもわかるように書かれてはいますが、最後まで読んだら、また最初に戻って読み返すと、理解がより深く確実なものになるでしょう。

#### ○記号等の説明

本書ではラテン語由来の略号やローマ数字などを使うので、ここで説明しておきます。英語で論文を読んだり書いたりするときにも必要となるものなので、覚えておくといいでしょう。

##### ・ラテン語由来の略号

- e.g. (<exempli gratia) “for example” 例を示すときに使います。
- cf. (<confer) “compare” 参照すべきもの、比較すべきものなどを示すときに使います。

・アラビア数字	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
ローマ数字	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X
	i	ii	iii	iv	v	vi	vii	viii	ix	x

- ・ AmE American English      アメリカ英語
- BrE British English        イギリス英語

#### ・ 音声表記

音声を表記する場合は [ ] で括ります。it は it という語、綴りを、[it] は発音を表します。[hap|hɒp] のように、| を挟んで 2 つの発音を示すときは、前が米音、後ろが英音です。

#### ○ 辞書

- ・ 『新英和大』 『研究社新英和大辞典』 第 6 版, 竹林滋編集代表, 2002 年, 研究社.
- ・ OALD      *Oxford Advanced Learner's Dictionary*, 8 版, Joanna Turnbull 編, Oxford University Press, 2010.
- ・ LDOCE      *Longman Dictionary of Contemporary English*, 6 版, Pearson Longman, 2015.

#### 謝辞

今回、本書がこのような形で出版されるようになったのも研究社の津田正氏のお蔭で、本の構成の決定から原稿の細部のチェックに至るまで、大変お世話になりました。また、本書の執筆にあたっては次の方たちから有益な情報、コメントをいただきました：笠井直美、小島ますみ、児馬修、佐藤翔馬、末岡敏明、田中伸一、谷明信、成田克史、西脇幸太、松井孝志、柳さよ、山田英二、山内昇（敬称略、五十音順）。特に英語史、音声学・音韻論については専門家の先生方から貴重な助言をいただきました。助言を活かせず不十分な記述となってしまったところ、修正されずに残ってしまった誤りもあるかもしれませんが、言うまでもなく、残る瑕疵の責任はすべて著者にあります。出版にあたりお世話になった方々には、この場を借りてお礼申し上げます。



# 目 次

はじめに ..... iii

## 第Ⅰ章 「五十音図」について考える——調音音声学入門——1

A. 「五十音図」について考える .....	2
i. いろはの配列順序 .....	2
ii. 五十音図の配列順序 .....	3
a) 五十音図の配列原理 .....	3
b) 子音の配列順序 .....	4
c) 母音の配列順序 .....	8
B. 調音音声学 .....	12
i. 母音 .....	13
ii. 子音 .....	14
iii. 音節 .....	17

## 第Ⅱ章 発音と綴り字——基礎編——19

A. 英語の文字 .....	20
B. 各文字の読み方 .....	21
i. 母音字の読み方 .....	21
a) 母音字の長音と短音 .....	23
ア) 母音字1字の長音と短音 .....	23
イ) 2字綴りの母音字の音価 .....	25
ウ) その他の長音・短音 .....	27
エ) 外来語の発音 .....	29
b) 音節構造と母音の長短 .....	30
c) 強勢の有無と長音・短音の対立 .....	36
d) 弱母音(強勢のない音節に現れる母音) .....	38

e) 開音節に生じる母音	39
f) 母音の三角形——前母音(字)・後母音(字)	40
g) w / qu の後の後母音字 a, o の発音	41
h) i と y	43
i) 語尾の u と w	45
j) l の前の後母音字 a, o の発音	46
ii. 子音字の読み方	50
a) 1 音価を基本とする子音字	50
b) s と th	52
c) 環境によって発音が変わるもの	53
ア) x の発音	53
イ) c, g の発音	54
ウ) dg の発音	57
エ) ng の発音	59
オ) -ften -stl -stm -sten -scl	59
d) 弱音節における子音字の口蓋化 (母音の弱化・脱落)	60

### 第 III 章 発音と綴り字——応用編——63

A. 各文字の名前	64
B. 内容語の最低文字数	66
C. 母音の弱化と冠詞と to の発音	68
i. 緊張音と弛緩音	69
ii. [i:] [í] と無強勢母音 [i] [ɪ] [ə]	69
iii. [ú:] [ú:] と無強勢母音 [u] [ʊ] [ə]	73
iv. 縮約形のパターンと冠詞, to の発音	76
D. 接辞の付け方	77
i. 接辞と綴り	77
ii. 母音字で始まる接辞	78
a) 発音により語末の子音字を重ねる必要のあるもの	78
ア) 語幹の強勢の位置に変化をもたらさない接辞	78
① -ing, -ed	78
② -er (-ed)	82



③ -ess, -y, -ish など	83
イ) 強勢の位置に変化をもたらすことのある接辞	83
① -ence	83
② -able	84
ウ) 接辞それ自身に強勢が来るもの: -ee	85
b) 語末の子音字を重ねることのないもの	86
① -ic	86
② 強弱弱パターンにおける短音化 (-ity, -(at)ive, -al)	87
iii. 発音上の長短, 綴り字上の長短, 接辞付加時の扱いにおける違い	88

#### 第IV章 分綴法 ————— 95

A. 分綴について	96
B. 分綴の規則	97
i. 文字とその音価に対する配慮	99
ii. 音節構造に対する配慮	104
iii. 語構成に対する配慮	108
C. 規則間の優先順位	114

#### 第V章 文字の種類・発達・用法 ————— 115

A. 文字の種類・系統・分布について	116
i. 文字の種類・分類	116
a) 文字と他の記号との違い	116
b) 対応する言語的なレベルによる分類	118
c) 系統による分類	123
d) 文字の分布	125
ii. 文字の発達の過程	126
B. 文字の構成・用法	129
i. 漢字の六書	129
ii. “音読み”と“訓読み”	131
iii. “送り仮名”	133

iv. 筆順：文字の書き順 .....134  
v. 五十音順・いろは：文字の配列法 .....136  
vi. 文字の再現性と不完全性 .....138

第VI章 アルファベットの起源と発達 .....143

A. アルファベットの構造 .....144  
B. アルファベットの発達 .....145  
    i. アルファベット .....145  
    ii. ローマ字の発達——西セム文字とその系統の文字 .....146  
        a) エジプトの聖刻文字(ヒエログリフ) .....147  
        b) 原シナイ文字 .....147  
        c) フェニキア文字 .....147  
        d) ギリシャ文字 .....148  
        e) エトルリア文字 .....149  
        f) ローマ字 .....150  
    iii. 文字の名称 .....151  
    iv. アルファベットの配列 .....155  
C. 手書き書体の発達 .....158  
    i. 書体の変遷 .....158  
    ii. 大文字体の成立・小文字の形成 .....160  
    iii. 民族書体の発達とカロリング朝の文字改革 .....162  
    iv. ゴシック体 .....164  
    v. 人文書体／ローマン体・イタリック体 .....166  
    vi. カッパープレート体 .....168  
    vii. ファウンデーション・ハンド .....170  
D. 印刷術の発明・発達 .....171  
    i. 活版印刷術の発明 .....171  
    ii. タイプライター .....174  
    iii. コンピューター，ワープロの登場 .....177  
    iv. キー配列について .....177  
    v. 文字の代用，合成 .....179  
    vi. セリフについて .....181

## 第VII章 英語における正書法の発達と音変化 —————185

A. 英語史の区分 .....	186
B. 正書法の発達 .....	188
i. ルーン文字からローマ字へ .....	188
ii. ノルマン・コンクエストの影響とその後の変化 .....	190
iii. 各時代のアルファベットと書体 .....	191
・古英語期 (Old English) .....	193
・中英語期 (Middle English) .....	196
・近代英語期 (Modern English) .....	200
iv. 発音と綴り字の乖離, 綴り字改革 .....	205
a) 近代英語以降における綴りと発音の乖離 .....	205
b) 綴り字発音 .....	205
c) 綴り字改革 .....	206
v. 「不規則」な綴りの由来 .....	206
a) 文字の不足 .....	206
b) 大量の借入語による他言語正書法の混入 .....	207
c) 音変化と綴り字の固定化 .....	208
ア) 古い音韻体系を反映した綴り字 .....	208
イ) 正書法の固定と音変化 .....	209
d) 語源的綴り字の発生 (16世紀以降) .....	211
e) 発音と綴り字が異なる方言(同一方言内の異形)に由来する語の 存在 .....	211
f) 文字の識別, 綴り字のバランス等の理由による改変 .....	212
g) 不統一な変更 .....	213
C. 歴史的な音変化 .....	214
i. 大母音推移 .....	215
ii. ウムラウト .....	217
iii. 開音節母音の長化と無強勢母音の弱化・消失 .....	219
iv. 同器性長化 .....	219
v. 母音の短化 .....	220
vi. 摩擦音での有声無声の対立 .....	221
vii. 弱強勢音節での摩擦音の有声化 .....	222

xii 目 次

viii. 重子音の単音化 .....	222
ix. 子音の脱落 .....	223
x. 口蓋化 .....	223
xi. その他の母音の変化 .....	224
付録 .....	229
A. 本書で用いた表記の一覧 .....	230
B. 各文字の読み方 .....	232
参考文献 .....	238
あとがき .....	241
索 引 .....	246

---

---

## 第I章

# 「五十音図」について考える

## ——調音音声学入門——

---

アルファベットについて学ぶなどと言うと、「英語を学び始めた小中学生じゃないんだから今さら何を？」と疑問に思う人もいるでしょう。各文字の大文字小文字を書くことができ、26文字の順序を覚えれば、アルファベットについてわかったと思う人は多いかもしれません。しかし当たり前と思っていることほど「なぜ？」と聞かれると意外と答えられないものです。これからアルファベットに関する様々な疑問について見ていきますが、その前に日本人にとって身近な仮名について考えましょう。仮名を習うとき、個々の文字だけでなく「五十音図」という配列表も覚えます。当たり前すぎて疑問に思ったこともないかもしれませんが、なぜあの順番に並べられているのでしょうか。配列の背後にある規則を探っていくと、日本語だけでなく英語も含め他の言語を分析するのに重要な働きを果たす、ある原理が見えてきます。

---

---

## A. 「五十音図」について考える

### i. いろはの配列順序

現在では仮名の配列順としては五十音順(あいうえお順)が普通ですが、次のいろは(伊呂波)と呼ばれる順番で並べることもあります。

いろはにほへとちりぬるをわかよたれそつねならむうゐのおくやまけふこえてあさきゆめみしゑひもせす(ん)

いろははなぜこの順番なのでしょう。次のように、漢字で置き換えられるものは漢字で置き換え、濁点も使って示されれば、理由はすぐにわかりますね。

いろ	にほ	ち
色は匂へど		散りぬるを
わ	よたれ	つね
我が世誰ぞ		常ならむ
う	おくやま	けふ
有為の奥山		今日越えて
あさ	ゆめみ	ゑひ
浅き夢見じ		酔ひもせず

「いろは歌」とも呼ばれることからわかるように、元々 47 文字の仮名をそれぞれ 1 回ずつ使って作った七五調の歌でした。涅槃経の一節(「諸行無常 是生滅法 生滅滅已 寂滅為樂」)を訳したものとも言われています。いろはのように仮名をすべてかつ 1 度だけ使って意味のある句にするというのはほかにもあり、「あめつちの詞」と呼ばれるものなどがありました<sup>1</sup>。すべての仮

<sup>1</sup> 「あめつちの詞(ことば/うた)」とは次の仮名 48 文字からなる誦文のことです。

あめ	つち	ほし	そら	やま	かは	みね	たに	くも	ぎり	むろ	こけ
(天	地	星	空	山	川	峰	谷	雲	霧	室	苔)
ひと	いぬ	うへ	すゑ	ゆわ	さる	おふせよ	えのえを	なれ	みて		
(人	犬	上	末	硫黄	猿	生ふせよ	榎の枝を	慣	れ居て)		

「えのえを」で「え」が 2 度使われていることから、ア行のエとヤ行のエの区別があった時代の平安初期の作と考えられています。

英語ではアルファベットの各文字を最低 1 つ含む短い文を“pangram”と呼びますが、

名を使っていることから文字の練習で使われ、仮名で配列するときの順番としても利用されるようになりました。

## ii. 五十音図の配列順序

### a) 五十音図の配列原理

いろはの次は五十音順について考えましょう。

あいうえおかきくけこさしすせそたちつてとなにぬねのはひふへほまみむめもやゆよらりるれろわ(ゐ)(ゑ)をん

よく使う仮名の配列順序ですが、一体どうしてこの順序なのでしょう。 「ゐゑ」を入れても48文字しかないのに、なぜ「五十音」と言うのでしょうか。

今度はすぐに答えがわかったでしょう。仮名を下のように表にまとめたものが**五十音図**ですが、ローマ字に転写すれば、縦に子音、横に母音を共有する文字が並ぶよう配列されていることが一目瞭然です。

わ	ら	や	ま	は	な	た	さ	か	あ
ゐ	り		み	ひ	に	ち	し	き	い
	る	ゆ	む	ふ	ぬ	つ	す	く	う
ゑ	れ		め	へ	ね	て	せ	け	え
を	ろ	よ	も	ほ	の	と	そ	こ	お

wa	ra	ya	ma	ha	na	ta	sa	ka	a
wi	ri		mi	hi	ni	ti	si	ki	i
	ru	yu	mu	hu	nu	tu	su	ku	u
we	re		me	he	ne	te	se	ke	e
wo	ro	yo	mo	ho	no	to	so	ko	o

表には空欄もありますが、縦5×横10=50で「五十音」と呼んでいるわけです。表の文字を「あいうえおかきくけこ...」と1列に並べると五十音順になります。さあ、これで問題は解決...とはなりません。単に子音を共有するものが縦に、母音を共有するものが横に揃えばよいのであれば、次のようになっていてもいいはずですよ。

有名なものとして次のものがあります。すべての文字を含むので、フォント見本でよく用いられます。

A brown fox jumped over a lazy dog.

A BROWN FOX JUMPED OVER A LAZY DOG.

4 第1章: A. 「五十音図」について考える

ゐ	り		に	ひ	ち	き	し	み	い
	る	ゆ	ぬ	ふ	つ	く	す	む	う
を	ろ	よ	の	ほ	と	こ	そ	も	お
わ	ら	や	な	は	た	か	さ	ま	あ
ゑ	れ		ね	へ	て	け	せ	め	え

wi	ri		ni	hi	ti	ki	si	mi	i
	ru	yu	nu	hu	tu	ku	su	mu	u
wo	ro	yo	no	ho	to	ko	so	mo	o
wa	ra	ya	na	ha	ta	ka	sa	ma	a
we	re		ne	he	te	ke	se	me	e

縦が「あいうえお」で横が「あかさたなはまやらわ」なのは単なる偶然ということもありえますが、子音と母音に着目した表になっているのに、子音同士、母音同士の順番は適当、ランダムというのも納得がいきませんね。表の縦と横が「子音」と「母音」という音に着目しているのであれば、「横の列」「縦の列」も発音に基づいて配列していると考えのほうが自然です。では発音のどんなところに注目しているのでしょうか。まずは子音から検討しましょう。

b) 子音の配列順序

次の表を見てください。アの段の仮名を並べたものですが、濁音があるものについては濁音を用い、その仮名の上に各音の子音部分を取り出して表示しました(濁音を使う理由は後で説明します)。

w	r	y	m	b	n	d	z	g	
わ	ら	や	ま	ば	な	だ	ざ	が	あ

これでもまだわかりにくいので、さらに次の3つのグループに分けて考えることにします<sup>2</sup>。

III			II					I
w	r	y	m	b	n	d	z	g
わ	ら	や	ま	ば	な	だ	ざ	が

まずはIIのグループの子音について考えましょう。[gzdnbm]と順番に

<sup>2</sup> ここではア行とカ行を母音グループと子音グループに分けましたが、過去の文献ではア行・カ行・ヤ行は喉音として同じグループに分類されています。過去の五十音図には現在のものとは違う配列のものもあり、IIIのグループを独立させずIIのグループと一緒に配置しているものもあります。



発音し、自分の発音を観察してみてください。[m, b] と [n, d, z] に共通点はないでしょうか。

iii		ii		i	
m	b	n	d	z	g

[m, b], [n, d, z] はそれぞれ発音するときに主に使っている場所(専門用語では「**調音位置**」あるいは「**調音点**」と言う)が同じになっています。つまり、

[g] は口の奥のほうを使って発音する

[z, d, n] は舌の先のほうを使って発音する

[b, m] は唇を使って発音する

ということです。i-ii-iii と進むにつれ、口の奥のほうから口の先のほうへと発音する位置が移るといいう規則性があることがわかります。

では次にグループ内の順番について考えましょう。i のグループは [g] の音しかなく順番は問題になりませんが、ii と iii ではどうでしょうか。[m b], [n d z] と順番に発音して違いを観察してみると、下の表に示すようにグループ内の順番は**発音の仕方**(専門用語では**調音方法**)に基づいていることがわかります。

iii		ii		i		
				z		摩擦により作る音
	b		d		g	破裂させて作る音
m		n				鼻に抜いて作る音

[n, m], [g, d, b] の発音の仕方が同じと言われてもピンと来ないかもしれません。違いがわからない人は、次の説明を読み、実際に発音しながら確認してください。

[n, m] … 鼻に抜いて出す音なので鼻を塞ぐと発音できなくなる。これに対し他の音は鼻を塞いでも発音できる。

[g, d, b] … 破裂させる音なので、[z] や [n, m] と違って伸ばして発音する

## 6 第1章: A. 「五十音図」について考える

ことはできない。[z] ならば [z:] (: は長く伸ばすことを示す) と伸ばして発音できるが, [g] を [g:] と伸ばして発音することはできない<sup>3</sup>。

[z] … 摩擦音なので伸ばして発音できる。[n, m] も長く伸ばせるが, [n, m] と違い息は口から出ていくので, 鼻をつまんでも発音できる。

さて, 上では濁音があるものについては濁音を基に考えましたが, では濁音と清音の違いは何でしょうか。例えばざとさ, [z] と [s] は何が違うのでしょうか。中学から英語を学んでいれば「有声音か無声音であるかの違いだ」とわかると思いますが, では, 有声音と無声音の違いって何でしょうか。

有声・無声の違いには**声帯の振動**が関係しています。発音するときに声帯が振動していれば**有声音**で, そうでなければ**無声音**になります。声帯は喉(喉仏)にあります。試しに, 喉に軽く指を当て [s: z: s: z:] のように [s] と [z] を交互に発音してみると喉が震えていないときと震えているときの違いがわかります。両耳を塞いで発音してみると響き方が違うことがよくわかるでしょう。

以上のように, 清音に対する濁音というのは, 「発音の位置」と「発音の方法」は同じだけれど「無声か有聲か」が違うものということになります。基本的にはこれでよいのですが, ハ行に関してはそうはいきません。ハの濁音はバで, 子音だけ比較すると [h] と [b] になりますが, [h] と発音するときには唇は閉じません。唇を閉じて発音するのは, 清音ではなく半濁音のとき, つまり [p] と発音するときです。したがって発音から見ると, カーガ, サーザ, ターダのペアに対応するのはハーバではなくパーバということになります。ではなぜハがパヤバと同じグループに入っているのでしょうか。これは, 五十音図が作られた頃は, ハ行の子音は両唇を使った摩擦音(「ファイト」)のファの子音 [ɸ] で発音されていたためです。室町時代のキリスト教の宣教師が出版したローマ字書きの日本語の本ではハ行音には f が使われていますが, このことから, 以前は今とは違い, ハ行の子音は唇を使った発音であったことがわかります。当時であれば「母<sup>は</sup>は」は [ɸaɸaɸa] となるわけですが, 助詞の

<sup>3</sup> もし伸ばせているとしたら, 母音 u を付け [gu:] と母音を伸ばして発音しているか, 破裂音の [g] ではなく摩擦音の [ɣ] という別の子音を発音しているはずです。[ɣ] については次節(p. 15)で説明します。

「は」は摩擦が弱まったけれど唇の狭めは残り [wa] に、それ以外は [ha] になり、[hahawa] となったというわけです。上で清音ではなく濁音を使ったのはこういう事情があったためです。

ここまでのところを整理しましょう。II のグループの子音は調音点・調音方法で分類され、さらに声帯の振動の有無で清音(半濁音)と濁音に分けられます。この分類を表にすると下のようになり、表の子音を右から順番に1列に並べると、kgszt d n p b m (カガサザタダナ(ハ)ババマ)となります。これでIIのグループの仮名が、なぜあの順序で並べられているのかがわかりました。

(iii)			(ii)			(i)	
		(φ)			z/s		摩擦により作る音
	b/p			d/t		g/k	破裂させて作る音
m			n				鼻に抜いて作る音

さて、今度はIIIのグループ、ヤ行・ラ行・ワ行です。このグループの音は「半母音」と呼ばれ<sup>4</sup>、IIのグループに入る純然たる子音とはちょっと違った性質を示す音です。

III			II						I
w	r	y	m	b	n	d	z	g	
わ	ら	や	ま	ば	な	だ	ざ	が	あ

ヤ (ya) の子音部分は発音記号では [j] となります。[j r w] と順番に発音してみると、IIのグループのときのように、調音点が段々と前に動いていくのがわかります。

[j] は 舌の真ん中ぐらいを使って発音する。

[r] は 舌の先のほうを使って発音する (cf. [s, z, t, d, n])。

[w] は 唇を使って発音する (cf. [p, b, m])。

<sup>4</sup> 五十音図は古代インドの言語であるサンスクリット(梵語)を書き記すのに使われた悉曇(梵字)の字母の配列に影響を受けていますが、高島(2005)によると、サンスクリットでrが半母音とされるのは、母音のrがサンスクリット語に存在するため、五十音図でrが半母音扱いされるのはそのためだそうです。

8 第1章: A. 「五十音図」について考える

ここまでのところをまとめると次のようになります。

半母音			子音							母音
口先 ←→ 口の奥			口先 ←————→ 口の奥							
唇	舌尖	舌中	唇			舌尖		舌奥		
w	r	y		(ϕ)			z/s		摩擦音	
				b/p		d/t		g/k	破裂音	
			m		n			鼻音		
わ	ら	や	ま	は	な	た	さ	か	あ	
ゐ	り		み	ひ	に	ち	し	き	い	
	る	ゆ	む	ふ	ぬ	つ	す	く	う	
ゑ	れ		め	へ	ね	て	せ	け	え	
を	ろ	よ	も	ほ	の	と	そ	こ	お	

c) 母音の配列順序

横の列の順序についてはここまでとし、今度は縦の列、母音の配列順序について見ていきましょう。

そもそも母音とは何でしょうか。辞書などでは「肺からの息が口の中で妨げを受けずに発音される音」のように説明されていますが、「口の中で妨げを受けず」とはどういうことでしょうか。今度は「子音」を辞書で引いてみると「発音器官のどこかの部分で肺からの息が妨げられて出る音」などとなっています。妨げがあると子音、妨げがないと母音になるようですが、この「妨げ」とは何でしょうか。実は、五十音図の横の列について見たときに出てきた「調音点」というのがこれに当たります。例えば、[b]の調音点は唇ですが、これは肺から出てきた息が主に唇で妨げられて作られる音ということです。ということは、子音と違い母音は息の妨げの位置で分類することができないことになります。ではどこに注目して分類すればいいのでしょうか。

「イエア」と言ってみてください。母音が変わると口に変化が生じませんか。「イエア」と発音すると口が段々広く開いて(舌の位置が段々低くなって)いきます。口の開き方が母音によって異なるのであれば、これで母音が分類できそうです。「ウオア」と発音した場合も口が段々と広がっていくのが観察できます。

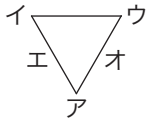
イ 狭	ウ 狭
エ ↓	オ ↓
ア 広	ア 広

では「アイウエオ」すべてを口の開き具合(舌の位置の高さ)で分類できるかという、それは無理です。どう並べてみても、「イエア」と「ウオア」のように、きれいに並べることができません。「イエア」だけ、「ウオア」だけなら、口がスムーズに変化していくように並べられますが、混ぜてしまうとそうはいきません。何か別の基準を持ち出さないとだめなようです。どちらにも「ア」は入っているので、これを中心にして下のようにならしてみましよう。

イ	ウ 狭
エ	オ ↓
ア	広

口の開き方を見ると「イウ」「エオ」が組になるので、鏡で口を見ながら「イウイウ...」「エオエオ...」と発音し2つの音の違いを観察してみると、唇の形が違うことがわかります。特に一音一音区切って力を込めて発音してみると違いがはっきり出ます。「イ」のほうは唇の形が比較的平たく、「ウ」のほうは比較的円くなっています。「エ」と「オ」についても同じような違いが観察されます。

では、「イ」と「ウ」の違いは唇の形だけでしょうか。そうだとすると、「イ」と発音するつもりで口を開き、その状態から唇だけを丸めて発音すると「ウ」になるはずですが、そうなりません。実際にやってみると、仮名では書けない音になってしまいます。今度は鏡で舌の動きに注目しながら「イウイウ...」と発音してみてください。普通に発音すると口の中の様子が観察しにくいので、意識的に唇を広めに開けて発音してみてください。「イウイウ...」と発音しながら鏡で舌の動きを見てみると、「イ」で舌が前のほうに来て、「ウ」で舌が後ろのほうに引っ込む様子が観察できます。「エ」と「オ」についても同様です。つまり、「イ」と「ウ」、「エ」と「オ」は唇の形だけではなく、舌の位置が前にあるか後ろにあるかという点でも異なることになります。各母音の舌の位置に着目すると下の図のようにまとめられます。この図のことを「**母音の三角形**」と呼びます。



「アイウエオ」の5つの母音は、口の開き(舌の位置の高さ)と舌の位置が前寄りか後ろ寄りかで分類できること、また、母音の音質の決定には唇の形も重要であることがわかりました。舌の位置の高さと前寄りか後ろ寄りかで、5つの母音を表に分類してみると次のようになります。この出来上がった表の母音を、上→下、左→右の順で1列に並べ直すと、「アイウエオ」になります<sup>5</sup>。

前	後	
ア		広
イ	ウ	狭
エ	オ	中

これで五十音図の縦の列・横の列それぞれについて、なぜあの順番で並べられているのかを見たことになります。全部を表にまとめると次のようになります。

半母音			子音						母音			
口先 ←→ 口の奥			口先 ←————→ 口の奥									
唇	舌尖	舌中	唇		舌尖		舌奥					
w	r	y		(φ)			z/s		摩擦音			
				b/p			d/t		g/k	破裂音		
			m		n				鼻音			
わ	ら	や	ま	は	な	た	さ	か	あ	a	広	
る	り		み	ひ	に	ち	し	き	い	i	狭	
	る	ゆ	む	ふ	ぬ	つ	す	く	う	u		
ゑ	れ		め	へ	ね	て	せ	け	え	e	中	
を	ろ	よ	も	ほ	の	と	そ	こ	お	o		

<sup>5</sup> 高島(2005)によれば、「エ」「オ」が後に来るのはサンスクリット語の特性に由来するようですが、歴史的な由来は別にしても、この配列には興味深いところがありま

以上のように、五十音図というのは、個々の仮名の子音部分と母音部分の発音に注目し、その音声的特徴に従い表にしたものです。そして、この表の各文字を1列に並べ直すと「アイウエオカキクケコ…」という「五十音順」になるというわけです<sup>6</sup>。

五十音図の配列は古代インドの言語であるサンスクリットの文字(悉曇<sup>しつたん</sup>、梵<sup>ぼん</sup>字)の一覧表の配列に似ており、悉曇の研究から生まれたとする説(悉曇起源説)が有力ですが、漢字音の研究で用いられる反切<sup>はんせつ</sup>の中から生まれてきたという考え方(反切起源説)などもあり、その成立については諸説あります。いずれにせよ、発音に注目するとこれだけ規則性が見つかるのに、それがまったくの偶然によるものだと考えられないので、発音に基づいて配列されているのは間違いありません。

上で述べた話は現代日本語での発音を基に単純化したものなので、実際の五十音図の成立について詳しく知りたい人は、山田孝雄<sup>よしお</sup>(1938)『五十音図の歴史』宝文館、馬淵和夫(1993)『五十音図の話』大修館書店、小松英雄(1979)『いろはうた』中公新書、高島淳(2005)「インドの文字と日本」(『月刊言語』第34巻第10号, pp. 42-49)などを読むといいでしょう。

五十音図のように、単にさういふものと思っていることにも裏である原理が働いていることがあります。配列の原理を知らなくても五十音順は使えます。世界の言語を見ると、母音の数が3つなら a, i, u となるのが普通で、i, u がなく a, e, o の3つからなる母音体系というのはありません。まずは明確に区別できる a, i, u があり、さらに母音の数が多くなると、e や o が加わるというように、空間をできるだけ広く効率よく利用するようになっていきます。五十音図は世界の言語の母音体系の調査に基づき決められたわけではありませんが、まずは違いが明確な「ア」と「イ」・「ウ」を挙げ、残りを後に挙げればこの配置になります。母音・子音・半母音の配置も、違いが明確な母音と子音を挙げ、それに属さないものを後に回したと考えると、類似の原理に従っていることになります。

<sup>6</sup> 半母音のところを除外すると、まったく妨げのない口を大きく開いた a から始まり、口を完全に閉じた m で終わる配列になっています。これは悉曇(梵字)の字母の配列に影響を受けたもので、悉曇の a, m (hum) は漢字では「阿」「吽」と転写し、「阿吽」で最初から最後までを表すことから、宇宙の始まりと終わりを表すものとされました。これは宗教的な像でも取り入れられており、例えば、神社にある獅子・狛犬も通常阿形<sup>あぎよう</sup>と吽形の対になっています。法隆寺の二体の金剛力士像は、口が開いているほうが「阿形」、閉じているほうが「吽形」と呼ばれます。ちなみに、2人の息が合うことを「阿吽の呼吸」と言うのは、このように「阿形」「吽形」が一对となっていることから来たものです。

すが、原理を知ると、見慣れたものの見え方が変わってくるのではないでしょう  
 いか。新たな視点が得られると、今度は、仮名の配列に意味があるのなら、  
 アルファベットの配列はどうなのか、と新たな疑問が生じるかもしれません。  
 これについては、第VI章で詳しく見たいと思います。

## B. 調音音声学

さて、いくつかのポイントを基に日本語の仮名が表す音を分類することが  
 できることを見てきましたが、英語など、他の言語の音を分類したり、日本  
 語でもさらに細かい区別をしようと思えば、上で見た表でも不十分です。国  
 際音声学会は、特定の言語に限らず、人間の言語音全体を表記するために、  
 国際音声記号 (IPA, International Phonetic Alphabet) と呼ばれる音声記号を  
 定めています、そのうち一部を取り出してみたのが次の表です。

		両唇音	唇歯音	歯音	歯茎音	後部 歯茎音	硬口 蓋音	軟口 蓋音	口蓋 垂音	声門音
子 音	鼻音	m	ɱ		n		ɲ	ŋ	ɴ	
	破裂音	p b			t d		c ɟ	k ɡ	q ɢ	ʔ
	摩擦音	ɸ β	f v	θ ð	s z	ʃ ʒ	ç ʝ	x ɣ	χ ʁ	h ɦ
	破擦音				ts dz	tʃ dʒ				
	ふるえ音	ʋ			r				ʀ	
	弾き音				r					
側(面接近)音				l		ʎ				
接近音				ɹ		j				
(両)唇接近音	(ʙ w)						ɰ w			
母 音	狭	前舌 i y ———— 中舌 i u ———— 奥舌 ɯ u				i u		a ɑ		
	半狭	e ø ———— ɘ ———— ɵ ———— ɤ o				ɪ ʏ		ʊ		
	半広	ɛ œ ———— ɜ ———— ɞ ———— ʌ ɔ				ɛ		ɔ		
		æ ɐ				ɛ		ɔ		
	広	a ɶ ———— ɑ ɒ				a		ɑ		

紙幅の関係で調音音声学についてこの本で説明することはできないので、  
 詳しいことは音声学の専門書を見てもらうことにして、この後の話で出てく  
 るものだけ抜き出し簡単に説明することにします。